

Gプロジェクト2022

「LINK ～魅力あふれるストーリー～」

中村 民恵, 森永 初代, 佐々木 亘, 上山崎絵梨, 末永 勝征

G Project 2022

Tamie Nakamura, Hatsuyo Morinaga,

Wataru Sasaki, Eri Kamiyamazaki and Katsuyuki Suenaga

Gプロジェクトとは、学生達が共通の目的ごとにチームを結成し、そのプロジェクトの活動を通して個性の伸長をはかると同時に、プロデュース力、グループ力、コミュニケーション力の向上と問題解決能力の育成を目的とする、現代ビジネスコースの中心的なプログラムである。今回のプロジェクトテーマを「LINK ～魅力あふれるストーリー～」に決め、制作してきた作品の集大成を学内で発表した。さらに、錦江町との連携事業「地域貢献プロジェクト」も10年目となった。それぞれのプロジェクトチームがテーマに沿った作品をどのように制作し、演出を行ったかを、コロナ禍での学生たちの活動を中心に報告する。

Key Words: [問題解決能力] [協働] [大学祭] [地域連携] [学士力]

(Received October 24, 2023)

序

Gプロジェクトとは、「プロデュース力・グループ力・コミュニケーション力の育成」という「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略」である。これまで現代ビジネスコースでは、専門教育カリキュラムの系列【Gプロジェクト】に設けられた5つのプロデュースで、グループでのコミュニケーション能力を伸ばし、同時に個々人のプロデュース能力を高め、学生の人間としての力を豊かにすることを目標にしてきた。さらにその活動をよりよく発展させるために2022年から5つのプロデュースを「Gプロジェクト」と「地域貢献プロジェクト」の2つに分けてスタートさせた。これまでと同じようにグループでの活動に対する自分の役割をしっかりと認識し、目標実現に向けた計画を立案・実行し、それぞれ特定のテーマをプロジェクトチームで達成できるように改善した。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で、様々な学内外の活動が制限された。昨年引き続き、教育課程の体系化や単位制度の実質化、教育方法の改善など学士力への取り組

* 鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻現代ビジネスコース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

みについてもウィズコロナ時代にどう対応すべきかを検討し、学習成果の発表の場である大学祭も昨年に続き舞台発表に限定し、実施することができた。限られた時間と制限のなかでの活動について報告する。

I. pingens pictoram

pingens pictoram (ピンジェンス・ピクトーラム) では、「Amore～姉妹の絆～」というテーマで、魔法の世界を舞台に姉妹愛や絆を表す動く絵本づくりを今年度は6名で行った。

私たちは、魔法を表すための光の演出と登場人物の髪色や洋服に力を入れました。色を塗る際に、光の調整を場面に応じて行ったことで、魔法が使われるシーンを表現。また、髪色や服装にファンタジー要素(図1)を取り入れ、世界観にマッチするような外見にこだわりました。



図1 主人公

活動を通して学んだことは、主に2つあります。1つ目は、メンバーの創造性を大切にすることです。物語を制作する上では、1つでも多くの意見が必要となります。どんな意見に対しても否定せずに受け入れることで、意見を出しやすい雰囲気を作っていくことができ、6名全員が納得のいく作品を制作する事ができました。2つ目は、Macのアプリケーションの操作についてです。制作を行う上で、作画・色塗り・録音・編集という作業がありました。人数が少ないこともあり、全ての作業を行うことは難しく感じることもありましたが、操作を自分たちで学ぶことで、映像編集の幅を広げる事ができました。

次年度に繋げたいこととして、Macのアプリケーションや機器の操作に慣れること、他のプロジェクトやプロジェクト内での情報共有を行うこと、役割分担をしっかりと決めることが挙げられます。特に情報共有の面では、チーフやサブチーフをはじめ、進捗状況や計画の見直しを常に確認することが重要だと考えます。

また、今年度はSDGsの観点から来場者へGoogle Formsを使ってWebでのアンケート調査を行いました。その結果、回答した方からは物語を理解することができた、映像が見やすい、分かりやすいと回答があり、私たちの伝えたかった姉妹の絆や愛が伝わっていることが分かりました。しかし、アンケートの回収率については、昨年度より大幅に減少しました。原因として、アンケートを実施しているというアナウンスを行ったが認識しづらい、スマートフォンを持っている人や使いこなせる人でなければ回答できないといった事が挙げられると考えます。そこで、紙でアンケート調査を実施した方が誰でも回答しやすく、集計には手間がかかるが回収率は上がると考えられます。(坂口くるみ)

II. Team Imagreat

Team Imagreat (チーム・イマグレート) (図2) では、「TUNAGU」をテーマに動画を制作し、活動を通して手を取り合い、協力しながら成長していくクラスの様子を表現しました。今回は風船を使用しバルーンリリースに挑戦しました。風船には自分のありたい姿や夢、目標を書き、

願いが叶うように空へ飛ばしました。

活動を通して学んだことは、大きく2つあります。1つ目はMacの操作方法についてです。Macの操作について学ぶために、Pagesやフリーソフトを活用して、オープンキャンパスで使用する名刺の作成や高校生などに配布する純短周辺マップ、リーフレット作成を行いました。



2つ目は動画の編集についてです。私たちはiMovieを活用し、学校紹介動画や純短祭の舞台発表で用いた動画の編集作業を行いました。iMovieでの編集技術を向上させるだけではなく、撮影する際のカメラの画角、画質の設定を行うことや、映るものに気を付けて撮影するなど広い視野を持ち、細かなところまで配慮することの重要性に気付くことができました。

私たちが後輩に伝えたいことは3つあります。1つ目は構成をしっかりと考えてから撮影を行うことです。動画制作を始める前にテーマやコンセプト、構成について最初にまとめておくことで活動を円滑に行うことができました。2つ目は、たくさん写真や動画を撮影しておくことです。素材が多いほど、動画や写真の選択肢が増え編集がしやすくなります。3つ目は役割分担を行い、計画的に進めることです。一人ひとりが責任をもって自分の役割を果たすことがグループで活動する中で大切になります。

制作した動画を通して学生生活での楽しさや、手を取り合い協力しながら成長する様子を伝えるように工夫しました。また、音楽と動画の内容からテーマである「TUNAGU」を表現することができたのではないかと考えます。(梅木菜々美)

Ⅲ. Princessプロジェクト

Princessプロジェクト(図3)では、今年度のテーマを「和(なごみ)花舞」とし、ドレスを花に見立てて花が舞う様子を表現するために、オリジナルドレスを製作して舞台構成に取り組んだ。活動を通して私たちは多くのことを学んだが、特に仲間と舞台を作り上げる中で、協調性と計画性を高めることができたと思う。



コロナ禍において全員でのミーティングを行うことが難しく、その結果ギリギリまでグループの考えがまとまらなかった。しかし、発表が近づくにつれ、話し合いを重ねるごとにメンバーの気持ちが一つになり、同じ目標に向けて一丸となって進むことができた実感している。

図3 Princessメンバー

これまで私たちは計画を立てることを一番苦手としていた。自分たちでスケジュールを管理して活動を行う中で、計画性の無さに改めて気付かされた。先を見通し、時間を逆算して計画的に取り組むことがより良いものを作り上げるために大事なことであると理解し、それぞれが自分のすべきことを確認してから行動するようになった。

観客の感想から、全員が身に付けた花の装飾品がテーマとの繋がりを感じさせる効果があったということや、表情や手の仕草、姿勢などが揃うことで見ている人に一体感を感じて貰うこ

とができたということが分かった。PDCAサイクルを活用することで目標を明確化し、改善に向けた取り組みをより効率的に行うことができたのではないかと考える。

そして後輩達に伝えたいことは計画的に活動を行うことと、雰囲気の良い環境を作ることの大切さである。計画を立てることや積極的にコミュニケーションをとることも大切だが、道具の片付けなど当たり前のことをきちんと行うことで、活動を円滑に進めることができる。そしてなによりも私たちが活動できるのはサポートしてくださった先輩方をはじめ自分たちを支えてくださる方々のおかげである。その全ての皆様への感謝を伝えることを忘れないように活動してほしい。(下橋美優)

Ⅳ. ごちそうフードプロジェクト

2022年度のごちそうフードプロジェクトは6名での活動となった。例年は、アップルパイ、クッキー、Gカフェの3つの部門に取り組んでいたが、アップルパイとクッキーの制作を協力して取り組むことにした。2022年度は新型コロナウイルス感染症対策が緩和されたことから、オープンキャンパスで高校生にクッキーを配布することを目標とした。

先輩方から代々受け継がれてきた伝統のクッキーを8月のオープンキャンパスに参加した高校生に配布した。クッキーを配布すると決めてから日数があまりなかったため、プロジェクトメンバー以外にも協力してもらい活動することができた。

アップルパイは先輩方から代々受け継がれた純心伝統のアップルパイ(図4)を1年生へ引き継ぐことを目的として制作を行った。また、今回の制作での改善点をもとに完成度の高いアップルパイにするためにアンケート調査を実施した。



図4 純心伝統のアップルパイ

調査は現代ビジネスコースの1年生を対象とし、アンケート方法は、Google Formsを用いた。回答期間は、2022年12月22日(木)から2022年12月29日(木)の1週間で回答率は100%であった。アンケート内容と結果は、下記の通りである。

【質問1. アップルパイの焼き色】について、ツヤがあり丁度いい(茶色)という回答が100%であった。ツヤを出すためにシロップを満遍なく何回も丁寧に塗ったことがこの評価に繋がったのではないかと考える。

【質問2. アップルパイの生地 of 食感】について、サクサクしている80%、少しかたく口触りがかたい10%、パサパサした感じがする10%という回答であった。生地を力強く押さえすぎたこと、オープンに入れる際に手間取ったことが原因だと考える。

【質問3. りんごの甘煮】について、丁度よい甘さ66%、少し甘すぎる9%、レモンの酸味が少し強い25%という回答であった。りんごの種類や甘さに合わせてレモン果汁の量を変更していくが、りんごの味見をしていなかったため甘さを把握することができていなかった。これがレモン果汁の入れすぎに繋がったと考える。

【質問4. りんごの甘煮の食感】について、シャキシャキ感がある9%、少しやわらかい食感である88%、りんごの形が崩れて柔らかすぎる3%という回答であった。りんごを煮詰める際の

鍋の火加減やアップルパイを切り分ける際にりんごの形が崩れてしまったことが原因だと考える。**【質問5. 自分も伝統のアップルパイの制作をしてみたい】**について、挑戦してみたいと思う81%、どちらでも良い19%という回答であった。作っている光景を見ることができず、出来上がったアップルパイしか見ていない人にそう思わせることができたということは、アップルパイの見た目や味、活動が少しでも認められたのではないかと考える。

今年度は選択する人数が少なかったが、1年間の活動を通して自ら考えること、事前準備すること、物事に責任を持って取り組むことの大切さを学ぶことができた。また、チーム内で協力し役割を分担したことで共通の目標に向かって進むことができた。アンケートのアップルパイ制作に挑戦してみたいという回答が多かったことから、先輩方から代々受け継がれた純心伝統のアップルパイを1年生へ引き継ぐことができたのではないかと考える。(坂上智香)

V. Gプロジェクトの活動について

今年度は、絵を描くことやアニメを見る事が好きな人が選択するプロジェクト、動画作り編集が好きな人が選択するプロジェクト、おしゃれやドレスづくりに興味のある人が選択するプロジェクト、食べることや料理をすることが好きな人が選択するプロジェクトの4つに分かれて活動を始めた。

今年度の純短祭に向けて全員で学生会の全体テーマをもとにコーステーマについて話し合ったが、一つのテーマにまとまるまでに4ヶ月を費やした。そのような中で活動をスタートした結果、限られた時間の中で舞台構成を考えることになった。4ヶ月かけて決定したテーマは「LINK～魅力あふれるストーリー～」。このテーマには、わたしたちから笑顔と伝統をつなげたい、みんなの輪を広げ純短祭への思いはひとつという意味が込められている。

発表部門は各プロジェクトチームに分かれて活動を行った。pingens pictoram, Team Imagreat, Princessプロジェクトの3つである。

pingens pictoramでは、「Amore～姉妹の絆～」というテーマで、魔法の世界を舞台に姉妹愛や絆を表す動く絵本づくりを行った。魔法を表すための光の演出と登場人物の髪色や洋服に力を入れ、色を塗る際に、光の調整を場面に応じて行ったことで、魔法が使われるシーンを表現することができた。また、髪色や服装にファンタジー要素を取り入れ、世界観にマッチするような外見にこだわった作品が完成した。

Team Imagreatというプロジェクト名は想像「Imagination」、素晴らしい「Great」、制作「Create」の3単語を組み合わせて、自分たちで想像し、考えたことを行動に移し、素晴らしいものをチームで団結して制作しようという意味を込めて「Imagreat」となった。「TUNAGU」をテーマに活動を通して手を取り合い、協力しながら成長していくクラスメイトの様子を表現するために、風船を使用してバルーンリリースに挑戦した。風船には、自分のありたい姿や目標を書き願いが叶うように空へ飛ばした。

princessプロジェクトでは今年度のテーマを「和（なごみ）花舞」とした。ドレスを花に見立てて花が舞う様子を表現するために、オリジナルドレスを製作して舞台の構成に取り組んだ。シーンを8つに分け、それぞれのドレスの特徴を生かした舞台構成に仕上げた。テーマとの繋

がりを表現するために、アクセントとして花のモチーフを用い、それぞれのシーンで表情や仕草、姿勢など花が舞うように工夫した。

そして、今年度も発表部門(図5)での大学祭での取り組みについて、Webアンケート調査を実施したが、例年のアナログではなくデジタルでのアンケート調査を試みたが、来場者の中で回答してくださった方は全体でわずか8人という結果となった。



図5 発表部門メンバー

アンケートはQRコードを読み取ることによってGoogle Formsで実施、期間は令和4年10月22日(土)から23日(日)の2日間で実施した。QRコードは会場内で配布したinvitation cardに印刷したが、回収率を上げることは難しかった。Webアンケートに回答していただくことの難しさを痛感した。

次に学内活動のごちそうフードプロジェクトは純心伝統のアップルパイを受け継ぎ、後輩たちに引き継ぐことを目的に活動した。プロジェクトメンバーで、伝統をクラス全員が受け継げるようにポイントを押さえながら、誰もが理解しやすいレシピになるよう改善した。その結果、クラス全員が一人で一つのアップルパイを作ることができた。さらに、制作したアップルパイを1年生と先生方に贈答し、アンケートに回答してもらうことで評価していただいた。

現代ビジネスコースの1年生にアンケートを実施し、アンケート方法はGoogle FormsによるWebアンケートとした。回答期間は令和4年12月22日(木)から29日(木)で実施し、その結果アップルパイを試食した1年生32人全員が回答した。

アンケート内容はアップルパイの焼き色や、りんごの甘煮の食感、生地焼き加減、自分も制作してみたいかなどの質問を設定した。

今回は発表部門、学内活動のアンケートはGoogle Formsを活用した。Google Formsでは簡単にアンケートを作成することができる。

例年行ってきたアナログ、紙媒体のアンケートではなくSDGsの観点からGoogle Formsを使用したWebアンケートで実施した。発表部門を観てその場ですぐ記入して提出するアナログアンケートと比べ、QRコードを読み取る方法のため、昨年度と比較して今年度は回答率が大幅に低くなってしまった。

その要因として、アンケートを実施しているという会場アナウンスを行なったが上手く伝わっていなかった、スマートフォンを持っている人や使いこなせる人でなければ回答できないという点があげられる。アナログでアンケート調査を実施した方が、考え方によってはバリアフリーで誰でも回答しやすく、集計は面倒だが回答率を上げることができる。Webアンケートは回収と集計の作業が容易であるため多くの場面で使用しているが、状況に応じた

活用の仕方を考える必要があることを学んだ。

今回のGプロジェクトの活動を通して、計画を立て、実行に移し、評価、改善するというPDCAサイクルを意識して活動したが、計画通りに行かないことばかりであった。その原因として個人がそれぞれの課題や問題を楽観的に捉えていたため、危機感が足りず思い通りに進まなかったことが挙げられる。そのため活動の計画を立てるときには時間に余裕をもって行動することが大切であることを痛感した。また、これまでの先輩方の記録を参考にすることやプロジェクト内で情報共有を密にしながら、進捗状況を把握することが大切であることを学んだ。

Gプロジェクトを通して、情報共有やミーティングを積極的に行うことでコミュニケーション力や自分のアイデアをカタチにしていくプロセス、制作するためのプロデュース力、グループのメンバーやクラスメイトと協働してひとつのプロジェクトを成功させるためのグループ力を身に付けることができたのではないかと考える。(晴永野乃花)

これまでのGプロジェクトは各プロデュースで活動していたが、2022年度からは4つのプロデュースをまとめ、さらなる成果を目指して前期「GプロジェクトⅠ」、後期「GプロジェクトⅡ」として活動を開始した。

Gプロジェクトに関連する科目のディプロマポリシーの位置づけは「適切に情報を共有することができ、それをもとに自ら判断し、行動することができる」、「集団の中での役割を見出し、協働して自らを高める態度を身に付けている」、「問題に気づき、自ら設定した課題に学んできたことを活用することができる」となっている。

「GプロジェクトⅠ」の授業アンケート結果では100%の学生が「全体を通して、意欲的に取り組むことができた。」と回答し、到達目標に対する自己評価は十分、概ね到達したと全員の学生が回答している。

次に「GプロジェクトⅡ」では、97.4%の学生が「全体を通して、意欲的に取り組むことができた。」と回答し、到達目標に十分、概ね到達したと全員の学生が回答している。この結果から学生自身が到達目標を理解し積極的に授業に取り組んでいる姿勢がうかがえる。それぞれのグループ活動を通して自ら判断し、集団の中での自分の役割を理解し、協働して学ぶ姿勢や授業で学んだことを活用する力を身につけたと確認できる。一つのプロジェクトとして直接、ディプロマポリシーを確認することができた。

毎年、学生達は大学祭において発表部門は取り組みの成果をアンケート調査している。今年度はQRコードを読み取るWebアンケートで実施した。しかし、学生たちが考えていたようには回収率を上げることはできなかった。Webでのアンケート作成は既存のフォームを活用して作成することから手軽で簡単である。その反面、いつでも回答できるといったことから、その場ですぐに回答しなくても良いといった意識が働く傾向が考えられる。

また、学生たちはエコ活動の一環としてもWebアンケートを試みた。そのメリットはなんといってもコスト削減である。紙を印刷するコスト、配布、回収、保管などはもちろんのこと回答内容が自動的に集計される。しかし、今回の回収率は大変低かった。舞台鑑賞といった場合にはその場で回収できるアナログ(紙)媒体で実施したほうが回答率や回収率が高い場合もあることを学生達も学んだようである。また、Webアンケートの説明不足も回収率の低さに

表れている。会場内でアンケートに回答していただくようにアナウンスを行ったが効果はかなり低かったことがわかる。

次のステップとして、アップルパイの試食に関しても1年生へのアンケートをWebアンケートで試みた。こちらの結果は高い回収率を上げることができたと報告している。このようにすぐに回答してもらえる環境においてのWebアンケートは非常に便利であることが確認できたようだ。

今年度もコロナ禍におけるGプロジェクト活動であったが、先輩たちのこれまでの活動を参考にしながら、「計画を立て、実行に移し、評価、改善するというPDCAサイクルを意識して活動したが、計画通りに行かないことばかりであった」と報告し、その原因が危機感の足りなさであった。メンバーで話し合う時間が少なかったことや情報共有が足りなかったのではないかと考察する。コロナ禍になるまではランチミーティングを各チームで行っていた。しかし、コロナ禍になり食事中における会話が制限されるようになると時間をわざわざ設定してまでミーティングを開くといった行動にかなり影響がでていたと推察する。

今回、ひとつのプロジェクトにまとめ、授業内でも情報共有の時間を設けたが、上手く活用できていなかったようである。また、学生達の情報共有においてSNSを活用した方法で行うことにより、情報伝達は速いが、その内容をどこまで理解できているのか、「わかったつもり」の情報共有による理解度の差が生じている。

これまでのGプロジェクトの報告でも「ミーティングの重要性」を学生たちが報告してきたが、そのことを理解するためには実際に活動してみなければ身につかないことがよく分かる。このように自分達でプロジェクトを実行していく過程において試行錯誤しながら実践力を身につけている「Gプロジェクト」はまさに人間力を高めるプロジェクトであるといえる。(中村民恵)

VI. 地域貢献プロジェクト

大隅半島錦江町のご当地アイドル『くわがたガールズ』の衣装制作をきっかけに2013年にスタートした地域貢献活動は早いもので10年目を迎えた。今年度から4つのプロデュースをGプロジェクトに1本化したこともあり、地域貢献プロデュースから地域貢献プロジェクトへと科目の名称が変更になった。今年度は、コロナ禍でなかなか活動に参加できない状況を考慮し、他の科目で参加を促していた「かごしま鴨池リレーマラソン」や「桜島・錦江湾横断遠泳大会」もボランティア活動の一環として取り組むことにした。

また、新たな産官学連携事業として、錦江町田代の茶畑で収穫した茶の実を有効活用する「お茶の実オイルプロジェクト」が始まった。耕作放棄地であるその茶畑は盤山地区にあり、10月末に収穫に訪れた。雪が降ると道路が通行止めになるほど山深い土地で、目的地に到着するまでの道は狭く、過疎化が進んでいる現状を目の当たりにした。到着すると、椿の花を少し小さくしたような白い花が咲き、茶の実がいっぱいになっていた。4月に収穫をやめてしまった茶畑は、雑草が生え、身長を超える大きさに成長した木もあった。役場の方から「お茶農家の方は、茶の生育が劣ると花がつきやすくなるため管理を徹底している」と説明を受けた。普段私たち

が目にする管理の行き届いた茶畑とは異なる様子に驚きながら、茶の実を収穫した。この「お茶の実オイルプロジェクト」については、学生の報告を参照されたい。

履修者17名だけでなく、今年度も現代ビジネスコース1、2年生全員が商品開発のアイデアやパッケージデザインなど何らかの形で協力し、その活動の取り組み状況については、江角学びの交流センターの地域貢献活動報告（令和4年度）にも記載されている。

この10年間の交流を振り返ると、錦江町を初めて訪れた学生が、錦江町役場をはじめとする町の方々の温かい声掛けに、故郷に戻ったような感覚になると感想を述べたことが思い出される。また、鹿児島市や錦江町でのイベントに参加すれば、卒業生が役場職員の方々に挨拶に来たり、観光交流課から部署異動された役場職員の方が激励に見えたり、学生さんが頑張っているからと差し入れをいただいたりすることもある。地域貢献プロジェクトでの活動は、卒業してからも繋がりをもち続けるような特別な経験となっていることがわかる。（森永初代）

純錦米を使用した商品開発「純心水田プロジェクト」は、地域貢献活動の主要な活動となっている。錦江町の方々のご協力のもと、自分たちの手で田植え、除草作業、収穫を行った。昨年度に引き続き、今年度も2種類の商品を開発し、「やさしい甘さに恋しちゃう!? パンプキンクロワッサン」と「お芋ゴロゴロ甘さにキュン♡ SweetPotatoCake」と命名して、県内の城山ストア、エコープ、コープかごしま、山形屋ストアで販売した。

商品開発会議は計4回行った。会議の前後にメンバーで打ち合わせを行い、次の会議に繋がられるように、話し合いたい内容や目標を明確にした。さらに、会議内容を踏まえて現代ビジネスコースの1、2年生に情報を共有して意見を募り、より多くの意見を反映できるよう努めた。実際に商品を開発するという事は日持ちやコスト、売れ行きなど考えなければならないことが多く、会議を通してその難しさを実感することができた。しかし、ご協力いただいた方々の意見やアドバイスを直接聞くことができたり、私たちの声を直接聞いていただくことができたりしたため、毎回、商品会議の時間は私たちにとって大変有意義なものになった。その後、商品の店頭販売を行い、お客様が手に取る瞬間に立ち会うことができたときに、達成感と喜びを感じ、商品開発に携わってよかったと心から思った。

商品開発以外に錦江町のイベント「やまんなか音楽会」、「いきいき秋祭り」や鹿児島市で開催された「かごしま鴨池リレーマラソン」、「かごしまお茶マルシェ」などの地域イベントに参加した。「やまんなか音楽会」では、事前に牛乳パックとペットボトルを再利用した灯籠を1、2年生全員で協力し制作した。イベント当日は、空にバルーンを飛ばすバルーンリリースの様子を撮影し、その動画を純短祭の映像の素材として使用することができた。「いきいき秋祭り」や「かごしま鴨池リレーマラソン」では、ボランティアスタッフとしてお客様や参加者が楽しめるよう他のスタッフの方々や仲間たちと連携し、周りを見て積極的に行動することの大切さを実感した。また、アミュ広場で行われた「お茶マルシェ」では、昨年度と同様に錦江町のお茶（田代茶・大根占茶）とほうじ茶まるほうろをセットにした商品を販売した。これらのイベントでは出店者やお客様など多くの方々と接することで、人との触れ合いの楽しさを感じることができた。

今年度は、「お茶の実オイルプロジェクト」という新しい企画にも挑んだ。お茶の実のオイ

ルを使用した商品を開発する活動で、今年はその活動の第一歩として茶の実摘み(図6)とワークショップ体験を行った。錦江町で摘んだお茶の実を学校に持ち帰り、実と皮を分ける作業を行った。単純な作業ではあるが大量の実の皮剥きをするため、多くの時間と労力を費やした。そのため、メンバーを入れ替えながら協力して作業をやり遂げた。皮を剥いた茶の実9kgは1ヶ月ほど乾燥させたのち、オイルを絞るために種子島の工場へと送った。



図6 茶の実収穫の様子

また、お茶の実オイルの商品化を具体的にどのようにするかを明確にするため、私たちは南大隅町にあるボタニカルファクトリーでのワークショップに参加した。黒木社長の講話で、化粧品は安全性や信頼性が重要であることを学び、オイルを使用したスキンケア商品の開発を進めるにあたって最優先に考えるべきであることを知った。さらに、化粧品は自分の肌に適したものをリピートして使用する傾向にあり、安全で良い商品が完成したとしてもお客様に知られなければ興味を持っていただけないこと、また、商品の種類によってある程度価格帯が決まっているため、どのようなお客様をターゲットにするかを検討する必要があることなど、課題が数多くあることを知った。

次に、オイルの調合について説明を受け、各自で好きな香りのオイルを調合してフレグランス作りを行った。それぞれ香りの好みはあるが、参加したメンバーで多数決を取り、より多くの人に好まれる香りを探し出した。お茶の実オイルの商品開発はまだ始まったばかりであるが、今年度の活動を後輩へと引き継ぎ、商品化が実現することを願っている。

今年度を振り返り、地域貢献活動に参加したことで私たちは多くの方々に支えられているということを実感した。そして、地域の方々の温かさに触れ、皆で地域を盛り上げる姿や地元を愛する心など、鹿児島の魅力をさらに発見することが出来た。これからも、この活動で学んだことを忘れずに、地域との触れ合いを大切にしていきたい。(川邊花／竹内菜々星)

結び

Gプロジェクトは、「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略—コミュニケーション力・プロデュース力・グループ力の育成—」という課題名で、2008年度から3年間、文部科学省の「私立大学等経常費補助金特別補助〈教育・学習方法等改善支援〉」における「学生の実体験を重視した教育研究」の一つとして採択及び交付を受けて、進められた。採択されてから14年が経過するが、2020年1月に新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が確認されてからの3年間は様々なことが制限されるなかでの活動となった。

現代社会における様々な課題と自律的なキャリア形成に必要な知識・技術・技能の修得を教育対象としている本コースにおいて、“Gプロジェクト”を通じて、学生たちが試行錯誤しながらも、自分の能力を発揮し、具体的な成果につなげる機会を得ることができたと思う。これから社会人として活躍する学生たちが、「社会に必要とされる人間」、「地域社会の進展」に柔軟かつ的確に対応できる人材となることを期待する。